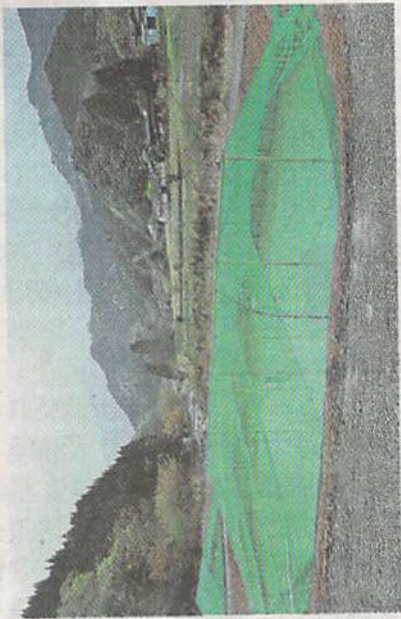


雌雄の分かれ方 解明へ

美郷町南郷 研究拠点池が完成



完成した国際うなぎラボの親ウナギ研究池
＝5日午後、美郷町南郷

ウナギ NOW 学日

NPO法人セーテイル・ライフ&リバー(高崎市・大森(中)理事長)が美郷町南郷に開設した世界唯一のウナギ研究・展示施設「国際うなぎラボ」で5日、研究の拠点となる「親ウナギ研究池」の竣工(しゅんこう)式があった。自然の環境に限りなく近づけた研究池で二ホンウナギを稚魚から育て、雌雄の分かれ方などを探る。謎の多い天

然ウナギの成育に関する本格的な研究は世界で初めて。

うなぎラボは減少著しいウナギの資源量を回復させることを目的に2013年10月、廃校となった旧渡川小学校舎を改修してオープン。ウナギ研究の第一人者で、日本大生物資源科学部の塚本勝巳教授(66)が所長に就いた。

研究池は五つ。うなぎラボの西約2キロにある渡川沿いの休耕田約1万1千平方メートルを築き、穴の側面を杉板で固定、底に砂利を敷き詰めた。渡川の水を引き込み、本来の

餌であるエビやカニ、小魚などを入れるなどし、自然の川の状態を再現した。

6月をめぐりに生後1年未満、体長10センチ前後の稚魚を放流し、池を使い分けて飼育密度や餌量などを調整。一般的な養殖ではほとんどが雄になるという、雌雄の発現などの解明、親ウナギに短期間で育成する技術の開発などに取り組む。雌雄の親ウナギをバランスよく放流できれば、より効果的に資源量を回復させることが期待できるといふ。

式には大森理事長、尾畑英幸美郷町長のほか、行政や研究の関係者、地元住民ら約100人が参加。研究池が生態環

境に適しているか確認も兼ね、試験的に80匹を放流するなどして完成を祝った。大森理事長が「研究が日本の養殖(ようまん)業と食文化を守る『救世主』となることを期待する」とあいさつ。塚本教授は「世界的な研究にこだわりながら、住民の方々にも参加してもらって地元密着のアプローチを目指すと抱負を語った。